INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

KUMAMOTO UNIVERSITY OF COMMERCE
KUMAMOTO JUNIOR COLLEGE

国際交流レター 第14号

KUMAMOTO UNIVERSITY OF COMMERCE
KUMAMOTO JUNIOR COLLEGE

CONTENTS

巻頭言　国際交流雑感…… 2
第１回外国人留学生弁論大会…… 3
第１回大田大訪問学生研修団派遣…… 4
モンタナからの第１回長期交換留学生…… 6
第１回大田大特別大学院研修団来学…… 9
熊本短期大学学長訪米…… 9
深圳大学との交流協定更新…… 9
第２回甲南イリノイ学生研修団来学……10
交換教授姉妹校滞在印象記……12
スポット……20
第３回長期交換留学生報告記……21
〈特集〉『留学生を支える人々』……26
1991年度留学生名簿……29
海外ゼミ研修……32
SEMINARS ……33
1991年国際交流 EVENTS ……34

'92. 3. 31 熊本商科大学・熊本短期大学国際交流委員会

——巻　頭　言——

国際交流雑感

前国際交流委員長　永　末　嘉　孝

英語の不得手な者が、いつまで務まるか、いつタオルを投げ込まれるかの緊張が解けぬ間に二年間が過ぎてしまった。

月並みなことばではあるが、全学のご協力によって、大過なく務めさせていただいたことに、先ず心からお礼を申し上げます。

さて、二年間を省みて、大言壮語して残した課題多し、と思うが、それでも姉妹大学との交流では、その伝統を守り発展させることができたと自負しています。

以下に今後の課題と思われることの一端を記して参考に供したいと思います。

1）教員の交換

派遣直前になって募集するのでなく、二年三年先まで公募したが充分成功したとは言えず、関係者に多大な迷惑をかけた。

2）学生の交換

モンタナから初めて4名の長期留学生を受け入れることができ、本学学生に大きなインパクトを与えている。これは、実は学長の英断によって、学生は所属する大学に学費と寮費を納入すれば、留学先での経費は不要とする新方式が採用されたから実現できたのである。これにより、'92年度からは本学から毎年、長期5名を派遣できることになった。今後も当然のことながら、学力、人物共に優秀な学生の派遣が肝要である。尚、熊本市が実施されている姉妹都市・サンアントニオ市のアワーレディオブザレイク大学、インカーネットワード大学との学生交換継続も切望されることである。

大田大学校へは'91年9月、初めて学生研修団30名を派遣し、日韓学生間に美しい友情が芽生え、相互理解が深められた。この研修団派遣の継続を望むと共に、更に学生の長期交換の機も熟したと思われる。

深圳大学とは毎年2名交換、'92年には第5回、10人目の派遣となる。入学後初めて学ぶ中国語であり、語学力の関係で単位互換が充分できていないが、帰国後の活躍を見れば大いに評価できよう。'92年は姉妹校締結5周年を迎える。学生研修団、スポーツ、文化交流団の派遣を考えては如何。

3）本学留学生会との交流

80名前後で組織する留学生会は協力し助け合って学園生活を送っているが、周知の託麻祭での「留学生の店」は今や学生、教職員だけでなく地域住民からも歓迎されている。また初めての日本語弁論大会は単にスピーチ・コンテストの意味だけでなく、留学生の日本（人）観も聞くことができた。「友好は易く理解は難し」こういう機会に多くの日本人学生が彼らの弁論に耳を傾け、真の友好をはかって欲しい。

4）学生国際交流会への期待

留学生会の忘年会に、未だ認知されていないがと断りながら、同会のメンバーが多数参加していた。日・米・中・韓国初め各国の学生たちが、共に歌い、踊り、歓談する情景は、50年前の不幸な時代を体験した者にとって、感無量であった。未来はこの若者たちによって築かれるのだ。このことからもリバプールポリテクニック、リヨン商科大学へと学生交流の輪が拡がることを期待するものである。　（1991年12月執筆）

第１回外国人留学生弁論大会

1991年11月２日（土）午後１時より第１回外国人留学生日本語弁論大会が開催された。本学園に在籍する外国人留学生も正規生・研究生合わせて80名を越すまでになり、日本語弁論大会開催の機運が高まってきていた。国際交流委員会はその機運の高まりを受けて、弁論大会開催の方向で検討を続けた。発表者は集まるだろうか、内容的に他の日本語弁論大会に比肩しうるようなものになるだろうか、心配な点もあったが、本学の留学生諸君を信じて開催に踏み切った。フタを開けてみると、心配は全くの杞憂に終わった。発表者の数が多く、最初は書類審査で足切りの必要があるのではと心配したほどであった。

当日の発表者の弁論も予想をはるかに上まわる立派なものであった。日本語能力の点から言えば、中国の大学で日本語を教える宋金梅さん、劉傑さんといったベテランから、日本語学習歴２ヶ月のアリサ・ピッツスティックさんまで、かなりの差があるが、発表者全員その差を感じさせないほどの熱弁であった。特にアリサさんの「トマトと文化比較」は学習歴２ヶ月とは思えない見事な日本語で会場の大きな拍手を浴び、特別賞に選ばれた。全体の結果は、やはり劉さん・宋さんの実力がズバ抜けており、劉傑さんの「私の目で見た日本女性の生き方の変化」が最優秀賞に選ばれた。その他にも、インドのデービス・セバスチャンさんの「私の目で見た国際化」はユーモアを混じえて、日本人の閉鎖性をチクリと風刺していたし、廖柏明さんの日本語の複雑さを体験を通して語った話等大いに会場を湧かせていた。

表彰式の後、宮内俊介審査委員長の講評があり、その後場所を移して、発表者と聴衆の懇談が２時間あまり続けられた。

今回の大会は丁度「託麻祭」の期間とぶつかり、学生の聴衆はやや少なかったものの、教職員や市民多数がつめかけ仲々の盛会であった。熊本県、熊本市、熊本県日中交流協会等の関係者の方々は最後の懇談会までご参加いただき厚くお礼申し上げたい。

（最優秀賞の劉傑さん）

第二回以降の弁論大会は学生組織の主催に移行し、大学は財政面のみを援助する方式に切り替えたいと考えられており、日本人学生諸君が一人でも多くこのような国際交流事業に参加して、留学生との交流を深めるよう願っている。　（1992年２月執筆、熊本商科大学助教授　西　紀昭）

〈最優秀賞〉
「私の目で見た日本女性の生き方の変化」
劉　　傑（中国）商学科研究生

〈優秀賞〉
「熊本の梅雨は苦手です」
宋　金　梅（中国）教養科研究生
「私の目で見た国際化」
デービス・セバスチャン（インド）
国際経済学科研究生

〈特別賞〉
「トマトと文化比較」
アリサ・ピッツスティック（米国）
経営学科交換留学生
「日本人の言葉と経済摩擦」
廖　柏　明（中国）経営学科研究生

第1回大田大訪問学生研修団派遣

韓国の大田大学校と姉妹校提携を結んでから、大田大学校の方からは、1987年から毎年学生研修団を迎えて来た。本学からもその間、ゼミ単位での大田大学校訪問は続いたが、正式な研修団の派遣には及んでいなかった。国際交流委員会の中からそろそろ正式に本学代表の研修団を派遣してはという声が高まり、1991年第1回大田大学校訪問学生研修団を派遣するに到った。初回の今回は、一般公募からの20名と学生組織代表の10名、計30名を送ることになり、4月から5月にかけて募集・選考を行い、派遣学生を決定した。

学生とともに大田大学校へ

熊本学園理事
熊本商科大学教授　田島　司郎

すでに自分のゼミ学生を率いて訪韓・大田大学校に視察・研修を行ってはいるが、この度は本学を代表しての公式訪問。団の構成も学生自治会代表と一般公募に応じ選択された学生（三名の留学生を含めて）の混成。性別も学年もバラバラ。殆どが海外初体験学生。……いささかの緊張と危惧は、幸いに杞憂であった。

大田大学校での心の籠もった温かい歓迎。ホームステイのもてなし。女子団員の別れの涙が印象的。水上スキーでの男子団員の「男」の交流。そして呉理事長ご自身による別れの握手。すべてが印象的で、団員諸君の融和と協調による旅は、大成功だったと信じる。これからもこの企画が久しく持続することを期待したい。

最後に、引率の原口・吉川両先生と千代盛氏（学生課学生係長）のご尽力に感謝し、滞韓中逝去された金麟済教授（前大田大学長）夫人のご冥福をお祈りしたい。

（1991年11月執筆）

韓国研修を終えて

商学科1年　上船　博子

“韓国の学生と意思の疎通ができるだろうか。”私は韓国に到着してからも、不安で不安で仕方ありませんでした。

ところが、ホームステイ先の方も少し日本語ができたということもあって、ホームステイ先の方のお友達何人かと井上さんと私とで、大変話がもりあがり、日本に帰りたくない気持ちになりました。

大田大学校は、大変大きかったですし、学生も勤勉でした。しかし、学生は本質的には商大の学生と変わらない様です。話す言葉は違っても、やはり同世代、会話をしていてとても楽しかったです。日本に一番近い外国にできた私の友人を、これからも大切にしていきたいと思います。

反省すべき点は、まず何よりもっと英語と韓国語を勉強しなければならないことだと思います。外国に行って改めて自分の語学力の貧弱さを痛感しました。早速、本学の英会話教室に申し込みをしたのは言うまでもありません。また、もっと時間厳守できていたらよ

かったかなと思う点もあります。

最後に、私は熊本商科大学の代表として行けたことを大変光栄に思います。今回はホームステイ期間が短かったこともあり、日本や韓国のことについて、お互いにくわしく話せなかったのが残念でした。それと、目的の一つだった韓国のコンピューターも見る機会がなくて心惜しいです。しかし、一回日本を出国したことで、何だか自信がついた様な気がします。これから、もっと勉強して色々な国に行って自分を磨きたいです。

私は二部に在学しているので、もしこの研修団に参加していなかったら、こんなに良い一部の仲間ができなかったろうと思います。

たくさんの先輩、そして友達、先生方、すばらしい研修をありがとうございました。

（大田大学校の皆さんと）

追伸

韓国は、ほとんど日本と変わらない気がしました。もしかしたら経済面では日本をぬいているかもしれません。今はまだ、日本の方が技術は上ですが、あと何年かしたら追い越されるかもしれません。（1991年９月執筆）

大田大学校訪問研修団日程表

月　日（曜）	日　　程	宿　泊
9／3（火）	大学　⇨　博多港　出発　〔フェリー〕	船　上　泊
9／4（水）	釜山港　⇨　慶州　（観光）	慶州ホテル
9／5（木）	慶　州　一　日　観　光	慶州ホテル
9／6（金）	慶州　⇨　大田大学校　歓迎式	ホームステイ
9／7（土）	温陽民族博物館・公州博物館見学 スポーツ交流（水上スキー）　送別会	大田ホテル
9／8（日）	大田　⇨　釜山　出発　〔フェリー〕	船　上　泊
9／9（月）	下関港　⇨　大学	

モンタナからの第１回長期交換留学生

1988年に四大学（モンタナ大学・モンタナ州立大学・熊本大学・本学）間交流協定を締結してから、本学から米国の姉妹大学・モンタナ州立大学への長期交換留学生派遣が始まり、1991年には４回目の学生を送った。また、これまで短期留学生の交換を行って来たモンタナ州の私立大学・キャロル大学との間にも四大学間交流協定に準じた取り決めがなされ、モンタナ州立大学とキャロル大学合わせて４名の学生が、最初の長期交換留学生として1991年９月に来学した。彼らの受入は、原則として本学の学生との共同生活という形を取っている。同世代の若者が、一緒に生活することにより異文化の壁を乗り越えて真の友情を育てていってくれることを願っている。

アリサ・ピッツスティックさん
キャロル大学４年生
経営学科で１年間受入
９月から中野裕治教授宅
１月から花谷薫助教授宅
にホームステイ中。

ティム・クルースナー君
モンタナ州立大学卒業
国際経済学科で１年間受入
ルームメイトは経済学科
１年生の村上大介君。

マット・ハーディ君
キャロル大学２年生
国際経済学科で１年間受入
ルームメイトは経済学科
２年生の古川信英君。

クリス・リーネッシュ君
モンタナ州立大学卒業
国際経済学科で半年間受入
ルームメイトは国際経済学科
２年生の竹永哲也君。

インターナショナル・ルームメイト募集

引き続き、1992年秋に次の交換留学生が来学するので、早速彼らのルームメイトの募集を４月に開始予定。多くの学生の応募を待っています。　（国際交流室）

真の友人

モンタナ州立大学卒業
クリス・リーネッシュ

どうして日本へ来ようと思ったのか、よく覚えていませんが、これまで大変楽しく有意義に過ごしています。モンタナ州は合衆国の中で最も快適な所です。雄大で美しいロッキー山脈、澄み切った青い空、数多くの湖、野性動物が生息している森があります。ですから、なぜモンタナ州が熊本県と姉妹関係を結んでいるのか容易に想像がつきます。熊本にも、阿蘇、天草、熊本城をはじめ、風光明媚な所が多くあります。

モンタナの小さな町での親切には慣れていたのですが、日本の人達を見て、大きな都市でも人は親切になれるものだということが分かりました。日本の皆さんの私に対する心遣いは本当に信じ難いほどすばらしいものです。これまで、他人にこれほど親切にしてもらえるものとは一度も考えたことはありませんでした。日本へ来てから、実に快適な日々を送っています。

しかし、快適な生活を送ることが、外国で生活することの目的や意義ではありません。外国で暮らすということは、新しい食べ物を口にするとか、観光地を見て回るとかいうようなことではなく、その国の文化を学ぶことだと思います。また、単なる異文化の体験でも不十分です。なにげなく体験しただけでは、近視眼的で自己中心的な見方しか生まれません。もっと注意深く見なくてはならないと思います。他国の文化を注意深く観察することで、実は自国の文化がより明確に分かってくるものです。多くの日本人は、アメリカ文化のある面に強い関心を持っているようですが、アメリカ人は日本にそれ程関心がありません。そして、アメリカという国は、日本の人がテレビや映画の中で見ているアメリカとは異なることが、実際にアメリカを旅してみればわかると思います。本当のアメリカの姿を知るには、偏見を持たず、広い心でアメリカを自分の目で見て回るのが一番です。

外国で真の友情関係を築くことも素晴らしいことです。現在アメリカに留学している日本人の友人は、友達をつくることの重要性を痛感しているようです。彼が以前、私に出してきた手紙には次のようなことが書いてありました。外国で友人を作るのは簡単だが、はたしてそうしてできた友人が本当の友だちかどうかわからない。一般的に言って、人は外国人に対しては親切だし、何か間違いをしても、外国人ということで大目に見てくれ、腹を立てられることはない。しかし、それでも真の友人を作ることは大切だと思うと。私も全く同感です。

さて、残念なことに、日本で過ごす日も残りわずかとなってきました。でもまたいつの日にか日本へ来たいと思っています。

（1991年12月執筆、日本語訳：吉川委員）
〔1991年９月～1992年１月　本学滞在〕

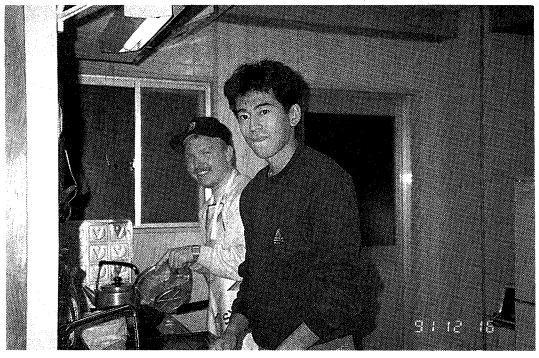
（見送りに早朝から空港に駆けつけた友人たちに囲まれたクリス）

ルームメイトの苦労と発見

経済学科１年　村上　大介

私は今、モンタナから来た交換留学生と一緒に暮らしています。今年の夏にインターナショナルルームメイト募集の広告を見て応募したら、幸運にも選ばれました。私はアメリカへの長期留学が夢なので、今のうちに少しでも生の英語に触れてみようと思ったのが、応募した大きな理由です。

この生活が始まってから三ヶ月たった今だからこそ、何の問題もなく生活していますが、彼が来てから最初の二・三週間は大変でした。何しろ、来日した当時は日本語を知らないどころか、日本の風習・慣習などの類もほとんど勉強してきていませんでした。だから箸の使い方、家の中では靴を脱ぐこと、日本流の風呂の入り方、寿司・すき焼き・天ぷら・うどんなどの日本食、日本茶はズズーッと音をたてて飲むこと等々、教えなければならないことが沢山で苦労しました。



（一緒に料理をする村上君とティム君）

一通りの生活が落ち着いて、次に待ち受けたのは「お金」をはじめとする実用的な問題です。実際、二人で生活するわけですから、家賃はもちろん電気料金、電話料金、水道代、ガス代までキチッと半分ずつ払うようにしているのですが、料金明細等を説明するのに骨が折れました。例えば家賃の中に含まれる『共益費』、辞書を調べても載っていないんです。なんとか説明しようと国語辞典を調べると、なんともまた訳しにくい言葉で説明してあるんです。それを自分なりに英訳しても意味が通じない、その一語を30分もかけて説明した後にやっと分かってくれたようです。

今挙げたのは特に苦労した例ですが、程度の差こそあれ、一事が万事こんな感じで苦労しました。その他たくさんの苦難を乗り越え現在もその生活は続いているわけですが、今では言葉に関する行き違いもほとんどありません。異国の人間と同居することは英語の勉強はもちろんですが日頃の生活まで学ぶ点が多いです。彼は私よりも四つ年上ですが、全然偉ぶったところがなく、かえって自分よりも子供っぽさが目立ちます。というより日本人一般よりも純真なので時々、自分はすれているんではないかと、恥ずかしくなることさえあります。日本人はもっと何事にも素直になるべきだなあと改めて思います。現在、この生活は私の性格や考え方などに多大な影響を与えながら進行中です。残り九ケ月、この貴重な体験をからだ全体でかみしめて、私の夢である留学に一歩でも二歩でも近づけるように頑張っていきたいと思います。

（1991年12月執筆）

ティム君が親友と呼んでいる村上君はルームメイトであるティム君の案内で、この春休み中に約１ヶ月間モンタナ州を中心に米国を訪問した。

第１回大田大学校経営行政大学院研修団来学

大田大学校に1991年春に開設された社会人を対象とした特別大学院（院長は大田大学校の呉熙弼総長が兼任）より、10月４日（金）第１期生と第２期生を合わせた約80名の研修団が、引率者５名と共に来学。特別講義を受講し、修了証書を手に帰国の途に着いた。今後も毎年本学に来学予定。

研修スケジュール　（1991年10月４日）

時　間	内　容
9:00 ～ 9:10	歓迎挨拶（熊本学園理事長・松村　武雄）
9:10 ～ 10:00	特別講義① 「日本的経営の特質とその将来」 講師　熊本商科大学教授・田島　司郎
10:10 ～ 11:00	特別講義② 「イデオロギーの終焉」 講師　熊本商科大学学長・岩野　茂道
11:00 ～ 11:40	修了証書授与式
12:00 ～ 13:00	昼　食

熊本短期大学学長訪米

1991年８月18日から27日まで園田富雄熊本短期大学学長が米国モンタナ州内の姉妹大学３校（モンタナ大学、キャロル大学、モンタナ州立大学）を親善訪問した。今回の訪問の主な目的は、1992年５月に予定されている熊本学園創立50周年記念式典への姉妹大学学長招待と、熊本商科大学の国際経済学科外国事情研修の引受内諾のお礼、そして熊本短期大学卒業生の姉妹大学編入に関する可能性の打診であった。

いずれの大学でも“如何にも姉妹大学”という歓待を受け、本学園の50周年記念式典には３大学ともに学長の来学が期待されそうだ。短大卒業生の各姉妹大学への編入に関しても、語学力さえあれば何の問題もなく受け入れて戴けるとの回答を得たので、今後学生のより一層の努力を期待するとともに、体制的には、単位換算に関する協定書締結が待たれる。

（国際交流係　喜佐田知子）

深圳大学との交流協定更新

1991年10月20日から24日までの４泊５日の日程で岩野茂道熊本商大学長に同行し、通訳の切通しのぶ（国際交流係）と共に姉妹大学である中国・深圳大学を訪問した。今回の訪問の主な目的は、これまでの４年間の交流実績を踏まえて、本学と深圳大学との「大学間交流協定」の更新のための調印であった。新協定調印により、更に交換教員、学生交流プログラムの充実・改訂が行われた。また、職員研修についても話し合いが行われた。岩野茂道熊本商大学長の深圳大学学生向けに「日本の教育の現状と大学生の就職状況について」と題しての講演や同キャンパス内の友誼林での記念植樹等の交流行事を通して、両大学間の友好交流の一層の発展が確認された。３年半ぶりの訪問であったが、４日間の滞在中、熱烈歓迎を受け、深圳大学の本学に対する深い友情を感じ続けた訪問であった。

（国際交流係長　西村　禮二）

第2回甲南イリノイ学生研修団来学

甲南大学に1年間のプログラムで留学中の学生研修団が、日本留学最後の研修である春のフィールド・トリップとして、1990年より毎年4月下旬、3泊4日の日程で本学を訪問、本学学生や教職員の家庭にホームステイしながら交流を深めている。彼らが神戸に戻ってから5月の作文の授業時間に書いた感想文を原文のままご紹介する。

熊本への修学旅行

ダートマス大学出身　Hope Renny

熊本に着いた晩の大学での歓迎会は気楽なものだったのでよかったです。食べ物もとてもおいしかったです。ホストファミリーに会ってうれしかったけれど、その時びっくりしたことがありました。ホストファミリーは親せきが山鹿で温泉を経営していたので私を連れて行きたかったけれど、次の日は温泉が休みでした。だから、ホストファミリーは歓迎会の後行くことにしました。ほかの学生ならたぶん困るかもしれないけれど、私は温泉ずきなのでちょうどよかったです。喜んで行きました。私のホストファミリーがやおやを経営していたのでとてもおもしろくていい勉強になりました。

一日目は自由にホストシスターと水前寺公園や熊本城などを見学しました。それは団体でしなくてよかったです。水前寺公園で能楽をしていたので、ぜひ見たいと思ってとどまりました。二日目の阿蘇でのピクニックは本当に楽しかったです。でも、みんなの前に紹介されてはずかしかったです。阿蘇火口も以前から見たかったから行ってとてもうれしかったです。どうもありがとうございました。

熊本の思い出

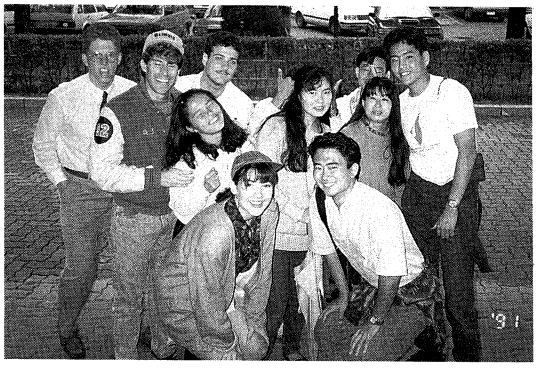
イリノイ大学出身　Shuichi Ikeda

今回の九州への旅は、いままで日本で旅行した中で一番帰りづらくなった旅だった。熊本で見た所や経験したことが、きのうだったようにはっきりと頭に残っている。言葉では表せにくい感動的な旅だった。

九州への旅は、留学期間の最後の行事であった。みんなで思いっきり楽しんでいい思い出を作ってこようと言う心がけで新神戸駅から出発した4月23日だった。その日は天気はあまりよくなかったが、僕はあまり気にしていなかった。熊本ではきっと晴れてくれるだろうと信じていた。

電車で5時間後ついた熊本は雨の中の最悪な天気だった。「ついてないなー」と思いながら熊本商科大学でのWelcome Partyへ行くバスの中だった。

熊本商科大学は立派でこぢんまりとした大学だった。そこで紹介された学生や先生たち



（キャンパスで本学の学生と一緒に）

もみんな親切でユーモアだったので、機嫌はすぐよくなった。おいしいごちそうと熊本人の熱烈な歓迎に引かれた僕はうれしかった。

次の日は、前の晩に紹介されたホスト・シスターと一緒に熊本の町を見学することになった。水前寺、熊本城と熊本市内をじっくりと味わいながら昼間を過ごした。またこの日も一日中雨だったので「九州はよく雨が降るな〜」と思いながら、天に向かって「いい加減にせんかい！」と目で怒っていた。でも、雨の中の熊本もなかなかおちついた雰囲気があってきれいだった。

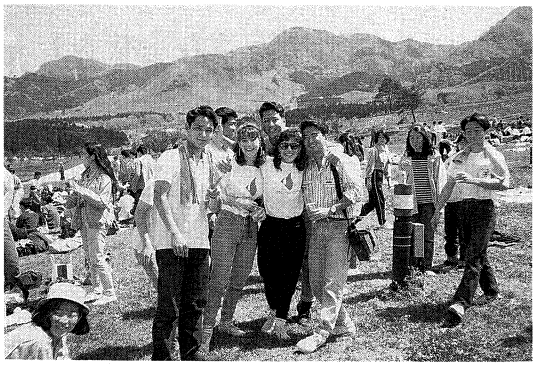
その夜、僕たちは、他の留学生とホストたちと待ち合わせ、カラオケに行くことになった。アメリカの歌もいっぱいあった店で、みんな心置きなく大きな明るい声で歌った。僕も歌うのがけっこう好きで、その上、とてもかわいい女の子が僕の隣に座ったので、燃えていた。

翌朝、まぶしい太陽に目をさまし、頭はちょっとガンガンしていたが、すばらしい晴れ空にあいさつとお礼をした。今日は「火の国」へ行く日だった。

阿蘇までつくのに一時間バスに乗った。バスの中ではみんな自己紹介をして友達を作り、時間は早く過ぎた。阿蘇についてから、まずお弁当を食べた。新鮮な空気と春の新しい緑をバックにしたAspecta広場は気持ちがよかった。本当によく晴れた、暑い日だった。

昼ごはんをすませてから、僕たちは阿蘇の火口の方へと向かった。くねくねした山道を登りながらすばらしい景色が目に入った。バスの中のみんなは歌を歌い、大騒ぎだった。やっと火口についたのは3時ごろだった。

火口からは、もくもくと煙が出ていて、くさったたまごの硫黄のにおいがプンプンとしていた。なかなか迫力のある風景だった。何しろ世界一の活火山なのだ。写真をいっぱい取り、わくわくしてた僕だった。



（阿蘇の自然を楽しむ留学生）

この後、僕たちは車の渋滞のためバスに2時間半、閉じこもって熊本へもどった。けっこうみんなは疲れている様だったが、ディスコに行くことになり、一度ごはんを食べてから、ディスコに集合することになった。　熊本での最後の晩を僕たちは踊り過ごした。ディスコは木曜日のため、ほとんど僕たち30人ぐらいがかしきりにした様な感じで踊りまくった。踊ってない時は熊本で新しく出来た友達と色々な会話をした。8時から12時までの時間が「アッ」と言う間に過ぎて行ってしまった。僕も先日、カラオケで隣に座ってくれた子が来ていたので、まるで天国にいる様な時を楽しんでいた。

翌日の朝のお別れは厳しいものであった。新しく出来た友達や楽しい時を過ごした熊本に未練たっぷりだった。みんなでグループ写真を取り、お礼とお別れを告げ、手紙を書くように約束をして熊本を去った4月26日だった。

短い四日間だったが、僕には熊本での日々が一生忘れない思い出になった。九州への旅行は期待以上にすばらしかった。

来学する学生研修団は、毎年熊本の家庭にホームステイしていますが、今回は本学教職員や学生をはじめ、学外の市民の皆さまにも彼らの一生の思い出作りにご協力いただきました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。　（国際交流委員会）

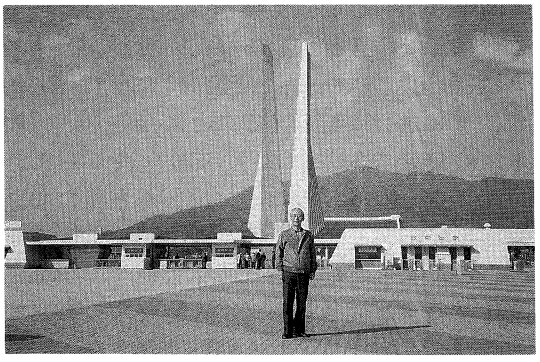
交換教授姉妹校滞在印象記

独立記念館を訪ねて

―― 大田大学校滞在記 ――

熊本商科大学教授　渡邊　　晧

1990年の秋の一日、来韓以来の希望であった独立記念館に大田大学校の学生に連れて行ってもらうことができた。平日なのに小学生や中学生の団体のバスが30台以上も来ていて驚かされた。歴史教育の一環だそうだ。



（民族の塔の前にて）

入場料を払って入ると、正面に121万坪の広大な敷地を見下ろして巨大な「民族の塔」が建ち（写真）、「独立の橋」を渡り、「民族大広場」を抜けると、これまた大きな「民族の家」がある。その中の彫刻群像を見て通り抜けると、「三・一広場」があり、広場を囲むようにして七つの展示館が配置されている。民族伝統館から、近代民族運動館、日帝侵略館、三・一運動館、独立戦争館、臨時政府館、大韓民国館と順に辿れ、その間に韓国の歴史を理解することが出来るようになっている。

初めの民族伝統館では、李舜臣将軍考案の世界最初の鉄甲船と言われる亀甲船の復元模型と1597年に秀吉軍を破った鳴梁大捷図が目をひいた。次の近代民族運動館には、1876年の朝日修交条規や1909年の安重根義士の「大韓独立」と血書された葉書など、第三の日帝侵略館には、日本軍による銃殺場面の大きな写真が壁全体に貼られ、日本軍憲兵と警官による愛国志士の拷問場面三景が人形で作られ、幅20cm位の窓から覗けるように展示されていた。女性志士の拷問場面もあり直視するには勇気がいる。小学生や中学生たちが食い入るように見学していて、この付近が最も混んでいた。その他、強制連行された韓国人が北九州の炭鉱の石炭の壁に書いた「オ母サン会イタイヨ」、「オ腹ガ空イタヨ」、「故郷ヘ帰リタイ」の白い文字にも胸が痛んだ。

三・一独立館には、独立宣言書やデモの様子を描いた図や血染めの韓服、独立戦争館には愛国団員の血書の宣誓文や独立軍戦闘図、臨時政府館には、関東大震災での韓国人虐殺（6千名余といわれる）の写真や1941年12月10日の臨時政府の対日宣戦声明書などと、次からつぎに日本と関係のある展示品がならんでいて、一巡してやはり疲れた。

日本の教科書問題をきっかけに、国民の寄付金によって、1987年の8月15日に開館されたというこの記念館には、韓国人の歴史観と民族感情が集められていると感じた。

二十一世紀委員会の最終報告書で、韓国側に「不幸な歴史の強調」が、日本側に「日韓の歴史への無関心と無知」があると指摘されたが、この「無関心と無知」は正確な史実を教えることでしか埋められないと思う。

（1991年12月執筆）

〔1990年2月～1991年2月　大田大学校滞在〕

熊本は私の第二の故郷

大田大学校　副教授
具　本　璋

私が見た熊本商科大学と熊本短期大学は、学生たちは闊達で、礼儀正しく、奉仕活動にも力を注ぎ、先生方は研究熱心で謙遜を忘れず、また、市民は清潔好きでした。

日本人は「前に行く車が先に行くべきだ」という普通の常識で全ての事に慎重で謙虚な国民だという印象を受けました。

滞在中、大学は勿論、幼稚園から高等学校に至るまで文化祭や体育大会等色々な行事を見ました。そんな時先生方は裏にいて、学生たちは自発的に協力しながら行動し、緻密な計画を立てて一糸乱れず、特に学生たちの忍耐強さと保護者の姿を見て、文字通り三位一体の教育が進行している様子に日本人の底力を見るような感じがしました。

更に、職員の勤務時間以外の勤務態度や自己責任完遂、開校記念式や歓送迎会は勿論、各種会議での進行処理、病欠や休暇で休んでいる仲間の為、少しも不満を持たず、一人二役及至三役をする様子に限りない同僚愛も感じられました。

特に九州の雄大で秀麗な自然と、阿蘇や雲仙にある温泉は勿論、あちこちに散在している文化遺産、そしてそれを大切にして手入れをする国民性、これは仏教の一面を見てもわかります。伝来させた韓国と比べると今は韓国が逆に取り入れるべきものもあります。

この点は企業についても言えると思います。実際、私自身の哲学等が仏教から出ていることからみても、これを基盤として競争をした結果、今の日本になったと言えると私は見ています。

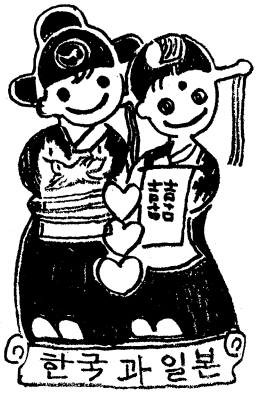
そして今後ももっと活発な交流をして、両校の発展は勿論、両国の友好関係にも寄与できたらいいと思います。この点で、私はこの熊本が私の第二の故郷だと思います。

国際交流室で（左から西村、切通、筆者、喜佐田）

最後に、熊本商科大学及び熊本短期大学滞在中私が色々お世話になった皆様に感謝するとともに、皆様方のお心遣いは永遠に忘れることはありません。今後もどうか末永いおつき合いの程よろしくお願い申し上げます。

（1991年８月執筆）

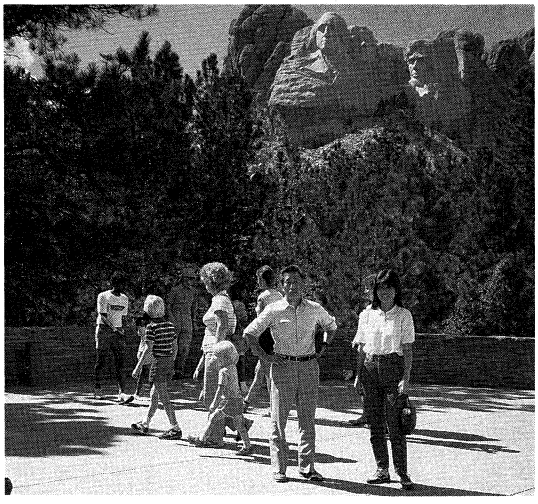
〔1990年８月～1991年８月　本学滞在〕



現地学習の提案

熊本商科大学教授　明石　喜嗣

モンタナ州立大学への交換教授制度に参加して、一番有意義だと感じることは、授業を受け持つことでした。日本語、日本社会について教えることは、とりも直さず英語を使って授業する、学生と話し合うことであり、これが自分にとって一番役立ちました。



(Mt. Rushmore で)

五年前、サバティカルで行った当初は、前もって原稿をつくりましたが、アメリカ学生はただ話を聞くのは嫌いで、問答の中で学んでゆくことを知り、原稿づくりはやめてしまいました。今回のように日本社会について話すとなると、宗教、政治から犯罪、住居から食事と幅広く、相当の語彙力を必要とします。

アメリカの学生は、社交性があり、自立していて、所謂ＳＯＴＡ（Student Over Traditional Age）と呼ばれる年配学生は大人として振る舞ってくれ、とても楽しい授業を持つことができます。この点は全て日本の事情と対照的と言えます。

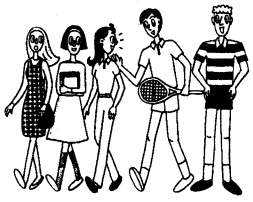
残念な事は、モンタナ州立大学側、熊商大側、双方の交流が極めて限られていることです。少々飛躍しますが、今日のような状況下では、一国内での学問等存在し得ないと思われます。例えば身近な事では、熊本で高いお金を払って外人から英語を習うより、物価や月謝が安く、円高を享受でき、しかも周囲が英語で満たされているアメリカで学ぶ方がいいに決まっています。

モンタナとは限りませんが、適地に分校を設ける構想はないものでしょうか。基地として利用できることで、はるかに多くの学生、職員、教員がアメリカを体験、理解する日には、あらゆる意味で、熊商大の姿は大きく変わって来ていることでしょう。

英語が事実上必要でない学生に、それができないと他になにもできない環境を与えてやることが早道です。教員にしても、外国が遠かった時代と違い、常時往来できる状況下では、各自の研究も大きく修正を迫られることは必至です。

地方私立大学のメリットとデメリットを考える時、この分校の実現ほど有意義なものはないでしょう。　　(1991年11月執筆)

〔1990年8月～1991年7月モンタナ州立大学滞在〕



日本からの贈り物

モンタナ州立大学　助教授
グレゴリー　D．オルソン

月日の経つのは早いもので、私が熊本を離れてから丸一年が過ぎました。本当に「光陰矢のごとし」といった感じがします。しかし、熊本での数々の思い出までもが忘却の彼方へと押しやられた訳ではありません。思い起こせば、熊本の人達から素晴らしい贈り物をいただきました。この贈り物は、もちろん、持ち運びできるような物でもなければ、家に飾っておくような物でもありません。もっと大切な物です。それは、私が日本文化から学んだ事柄です。

私が熊本で学んだ事は、私の家族や私の人生の中に取り入れていきたいと思える素晴らしい性質のものです。また、それはMSUの学生達にも伝えたいものです。熊本滞在中、九州の多くの人から、人生、哲学、生活信条を学び、私の一部にしようと努力しました。

ここで、私がお話する日本人の特質は、日本の皆さんが文化遺産を通して代々受け継がれているものです。私が最初にこの特質を知ったのは、日本の武道について学んだ時で、この精神的特質は今でも武士道精神の中に脈々と伝わっています。日本文化のこうした特徴は、今日の日本人の中に見られますが、遠い将来、もしかするとなくなっているかも知れません。

このような日本人の特色の中で、私が最も強く心を引かれたのは「思いやりのある行為」をするという考え方です。この考え方は「礼」にも通じ、礼節の本質的要素です。個人主義の強いアメリカでは、日本人のこのような特色は益々見られなくなっています。しかし、熊本滞在中はこうした思いやりのある行為に毎日助けられました。

一例を挙げれば、ある日の午後、私は妻のPeggyと二人の子供SeanとTrevorを連れて熊本の繁華街を歩いていました。ところが、運悪く道に迷ってしまい、おまけにどしゃぶりの雨。地図を広げ、悪戦苦闘していると、一人の日本人男性が近づいてきて、道に迷ってらっしゃるようですが、私に何か出来ることはありませんかと言ってくれました。私達は思わず大声で「はい、お願いします。」と答えました。すると、この人は親切にも私達の目的地まで一緒に行ってくれたのです。

（お別れ会で友人たちに囲まれた
オルソン先生ご家族）

日本でこのような事があってから一年後、クリスマスの数日前のことです。ボーズマンの北の小さな町の郵便局で私は小包の手続きをしていると、中で道を尋ねている人がいました。"Big Sky", "ski", "can't find the way"という言葉が聞こえてきましたが、アクセントからしてアメリカ人ではなさそうでした。ところが、郵便局の人があまりにも早

口で説明したのでその人はよく聞き取れずに困っている様でした。それで私に何か出来ればと思い、その人に話しかけてみたのです。たどたどしい英語ながらも、私に助けてほしいと思っていることが分かり、私も身振り手振りで私の後について来るように合図をしました。彼の目的地までほんの歩いて15分程度で、私にとっては大したことではありませんでした。が、しかし、スイスから来ていた彼と彼の家族にとっては大変親切な行為に映ったようでした。

スイスから来てたこの人達を道案内しながら、一年前私が熊本で出合った同じような状況を思い出さずにはいられませんでした。一年前、日本で始まった「思いやりのある行為」の輪が今、こうして広がっているのです。

日本の人達に学んだ「礼」に通ずるこうした「思いやりのある行為」は、大好きな日本からいただいた、本当に素晴らしい贈り物となっています。

（1991年12月執筆、日本語訳：吉川委員）

〔1990年9月～12月　本学滞在〕

深圳の思い出

熊本商科大学助教授　杉田　憲道

香港の九龍駅から電車で45分ぐらいのところに、社会主義中国のなかで最近とくに注目を集めている深圳経済特区がある。

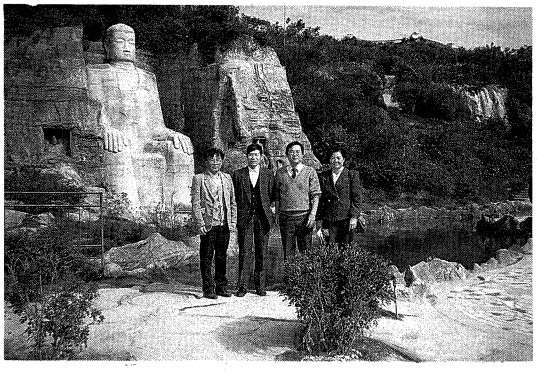
私は、この特区内にある深圳大学に、わが大学からの最初の交換教員として1990年10月から半年間滞在した。その前の年からはじまったソ連・東欧社会主義諸国の激変が中国にどのような影響を及ぼすのであろうか？そのことが、私にとって滞在期間中の大きな関心事であった。

中国が急速にソ連・東欧化するのではないかという私の「期待」は、しかし、現象的には裏切られてしまった。深圳経済特区建立10周年をむかえ、天安門事件にもかかわらず「実事求是」の精神のもとで社会主義政治体制・経済体制改革が実践され、それなりの成果を収めていたからである。その要因は、一体どこにあるのか？　私は、つねにこの点を深圳の地で考えざるを得なくなってしまった。

＊　＊　＊

深圳大学では、外事辦公室と特区経済研究所のスタッフの皆さんに大変お世話になった。

まず、「深圳特区の経済発展に関する当面



（錦秀中華・楽山大仏の前で深圳大学の皆さんと）

の主要問題」（鄭天倫教授・深圳大学副校長）と「経済特区10周年理論検討会の主要論点」（陳灼華副教授・特区経済研究所副所長）についておふたりから説明を受けるとともに、再三、率直な意見交換をすることができたこと、さらに深圳市財務局や深圳市会計士事務所での取材だけでなく、いくつかの国営企業の実態調査さらには深圳以外の４つの経済特区の調査、研究をおこなうことができたことも、すべてこのスタッフの皆さんのおかげである。また、深圳に進出している日系企業がかかえているさまざまな問題も、郭來舜副教授の助言をいただき、かなり鮮明になってきた。郭先生にも感謝を申し上げる。

これらの調査・研究の成果は、近いうちに『海外事情研究』に掲載する予定である。

＊　＊　＊

私は、この機会を利用してどうしても報告したいことがある。それは、滞在中のよき相談相手であったミヒャエル（趙俠）さんのことである。深圳大学の前学長の「お抱え運転手」であった彼は、取材のたびごとにハンドルを握ってくれたが、その目的地までの彼との対話は、心地よかった。

今でも北京大学でドイツ文学を講義されているドイツ人の母親、「大躍進」の時期に大学の職を追われた中国人の父親をもったがゆえに背負わなければならなかった数々の苦悩を、彼は少しずつ語ってくれた。なにごともありのままの姿が一番人の心をとらえるものである。

ソ連・東欧の出来事をふりかえりながら、私は、社会主義の中心に人間がいなければ、社会主義の理念は実現されないことを再確認した。手あかのついた「共産党」の旗をいくら高くかかげても、国民の信頼は獲得できないのである。党の献身性、自己浄化こそが問われている。

同じ共産党の指導の下に社会主義建設をすすめている中国が、今こそ決して歴史の徒花でないことを証明してほしいと願っているのは、私だけであろうか。

（銀湖にてミヒャエルさんと一緒に）

＊　＊　＊

いつでもそうであるが、このたびも私は、さまざまな思い出をもって深圳を去った。その思い出のなかには、深圳大学の多くの人々の好意がある。

なかでも、いろいろな取材を成功させるために細かく気をつかっていただいた侯梅芳外事辦公室副主任にとくに御礼を申し上げたい。また、張野外事辦公室主任は、つねに明るい雰囲気をかもしだして、私の滞在を愉しくしていただいた。さらに、偉丈夫な應啓瑞副学長の笑顔も忘れられない。

深圳を去る日、ミヒャエルさんが「いつものように」クラシック音楽を流しながら、駅まで運転してくれた。出国手続きを待つ大勢の人たちのなかから振り向くと、この小柄な「ドイツ人」が高く手をあげている。これも、私の思い出のひとつである。

（1992年１月執筆）

〔1990年10月～1991年３月　深圳大学滞在〕

忘れられない日々

深圳大学　講師
戴　璨　之

深圳に帰ってきてもう一ケ月以上になりましたが、まだ慣れていないような気がします。目を閉じると、熊本学園にいた頃の風景がいつも私の脳裏に輝いています。銀杏並木のキャンパス、厳かでどっしりとした本館と研究棟、賑やかで活気に溢れた食堂、半年間泊まっていたあのきれいで設備の整ったダイヤパレスのマンション……。特に忘れられないのは長い間お世話になった熊本学園の先生方と職員の皆様の笑顔です。その懐かしい声が今でも耳に響いているようです。

振り返ってみると、本当に密度の高い半年間を送ってきました。六ケ月の間で勉強になったり、体験してきたりしたことは今までのどの時よりも豊かで、充実したものです。

まずは中国語の授業や研究課題などは諸先生方と国際交流室や図書館、資料室の皆様のご協力でスムーズにやり遂げました。一番ありがたいのは中国でなかなかできない勉強（例えば英語や韓国語）もして、また日本の伝統文化と言われる茶道や華道にもチャレンジしてみました。どちらも入門ともいえない、とても初歩的なものですが、気の向くまま、好きなこと、したいことを自分の意志によってすることができて、とても嬉しく思いました。

（お別れ会で菊陽町役場の“朋友”に囲まれて）

もともとは交際が苦手で内向的な人間ですが、環境が変わったせいか、熊本に参ってから色々な方と付き合うようになり、自分でも驚くほど心の扉が開いたのです。それは恐らく熊本学園の皆様や日本人の友達の心を込めた情熱が私の心を暖めたり潤したりして性格までも変えてくださったのではないかと思います。

日本人の方とずっと前からも付き合っていますが、今度こそ幅広く交際することができただけでなく、その生活に突込んで心の触れ合いもできたお蔭で、今までより日本という国、また日本人が少し深く、全面的にわかったような気がします。これは日本語の教師としての私にとって、とても大切なことだと思います。

とにかく熊本に滞在していた半年間は色々体験でき、見聞を広め、知的に豊かになった上に、心も充実してきて、本当の自我を見つけたような気もします。この紙面を借りてこの半年間貴重な体験の機会をたくさん与え、良い思い出を数え切れないほどつくってくださった熊本学園の学長先生をはじめ、諸先生方と職員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

一週間ほど前、交流協定の再調印に深圳大学にいらっしゃった岩野学長をはじめとする熊本商大、短大の代表団を迎え、一ケ月半ぶりにお目にかかって、とても嬉しく思いました。短い二日間でまた忘れきれないシーンがいくつも深く心に焼き付けられています。今回の無期限の協定が調印された直後に当たり、熊本学園の一層の国際化、一層のご飛躍、また熊本商大・短大と深圳大学との友好関係が時間を超えて末永く続き、益々発展していくようお祈り申し上げます。（1991年10月執筆）

〔1991年2月～8月　本学滞在〕

何故日本へ

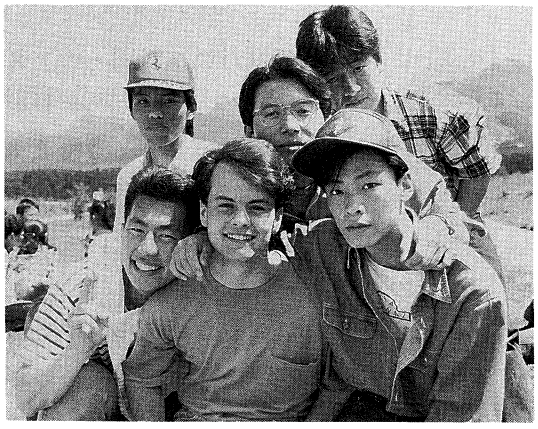
モンタナ州立大学　交換教員
グレゴリー　H．オルソン

モンタナ州立大学と熊本商科大学間の交換教員として私が赴任することになり、その準備に追われていた頃、友人や親類から「どうして日本へ」と決まって聞かれました。当時、外国の文化について学ぶことは良い経験になるからと答えた程度で、自分でもよく分かっていませんでした。ただ、日本人や日本文化について勉強できると思うと、何かワクワクしたことは、はっきりと覚えています。

さて、この一年で私の生活は大きく変わりました。一年前は学生としてレポートや試験で苦しんでいたのに、現在は教師として学生にレポートを課し、試験をしている次第です。また、日本では多くの家庭にホームステイのお世話になり、たくさんの友人もでき、色々なことにチャレンジしました。そして、日本でも多くの人から「どうして日本へ」と聞かれましたが、納得のいくきちんとした答えはできませんでした。

先日、友人の成人の祝賀会に呼ばれて出席した時のことです。お祝いには親類の人が30人以上も集まっていらっしゃいました。私の隣には79歳の彼のおじいさんが座っておられました。おじいさんは私の手を握って、孫が私と仲良くしているのが大変嬉しいし、平和であることは何と素晴らしいことであることか、と言われました。

その時ふと、これまでよく聞かれた質問「どうして日本へ」の答えが浮かんだのです。私が日本へ来たのは、日米両国の交流や相互理解のためであり、それを可能にしているのは両国の間に友好な関係が築かれていたからだということが。その時まで私は、日米の友好な関係を当然のこととして考えていましたが、もし両国間の関係が友好的でなかったならば、私の日本での素晴らしい経験もありえなかったはずです。



（学生と一緒に）

モンタナ州立大学と熊本商科大学の交流プログラムが現在まで続いているのも、日米両国の人々が両国の友好と交流を心から希望しているからです。そして、私は自分がその一役を任っていることを大変光栄に思っています。ひいては、日米間に見られる友好の絆が世界中へ拡がっていくことを心から願っています。

（1992年１月執筆、日本語訳：吉川委員）
〔1991年１月～８月　本学滞在〕

スポット

交換教授往来

1991年３月中旬、勝部伸夫助教授（企業論）が第４回交換教授として韓国・大田大学校へ赴任し、１年間の派遣期間を終えて本年２月末に帰国。

同年９月には米国・モンタナ州立大学よりハロルド・シュロッツハウアー教授（美術）が来熊。１年間の予定で英会話を担当いただいている。

同じく９月には韓国・大田大学校より第７回交換教授の鄭鳳輝副教授（刑法）が来学され、学生は勿論、教職員向けの韓国語も半年間担当いただいた。

中国・深圳大学からも前期の戴璨之先生（日本文学）に続いて、外事辦公室の副主任である侯梅芳先生(日本語)が９月から本年３月中旬まで本学で中国語を担当いただいた。

1992年１月から慶田收助教授（都市経済学）が四大学間交流プログラムの第４年度交換教授として米国・モンタナ州立大学へ赴任。８月までの滞在予定である。

４月には、大田大学校から第８回交換教授である宣吉均助教授（貿易論）が来学予定。その後は、８月に北原明彦助教授（マーケティング・マネジメント論）が半年間の予定で訪韓、同じく８月から熊本短期大学の原口行雄先生（英語学）が訪米し、９月には嶌啓教授（経済原論）が訪中予定である。

ＵＭ新学長来学

1991年７月には、前年８月にモンタナ大学第16代学長に就任されたジョージ・デニソン氏が、夫人を伴って本学を訪問された。

松村熊本学園理事長、岩野商大学長、園田短大学長をはじめ、本学の国際交流関係者と親しく懇談し、交流プログラムの今後などについて意見を交換した。

ＭＳＵ新学長来学

1991年５月にモンタナ州立大学の学長に就任されたマイケル・マローン氏が、11月25日、日本に滞在中のご子息と、丁度モンタナから来熊されていたモンタナ州上院議員のボブ・ブラウン氏を伴って、本学を訪問され、岩野商大学長、園田短大学長らと懇談し、10年に渡る両大学間の友好の絆が確認された。

第3回長期交換留学生報告記

心のゆとり

経営学科4年　古堅　育子

〔派遣先：深圳大学　1990年2月～1991年2月〕

私の知識量が少ないこともあった為か、現実の中国は、私をたいへん驚かせた。あらゆる面で私の想像を裏切っていたのだ。

この様に言うと少々オーバーであるが、私は少なくとも今回の留学のお蔭で、以前よりも中国が好きになった事は確かである。それでは、私の見て感じた中国を紹介したいと思う。

まず、広い国土。これは地球儀でも一目瞭然だが、実際に目の当たりにすると、本当に広い。道路のとり方がとにかくダイナミックで好きだった。ただ、環境は整っているとは言い難い。水道水からは、雨が降るとだいたい赤い水（泥水）が出るし、停電はしょっちゅうである。又、同じ中国でありながら、北と南、沿岸と内地では生活水準がかなり違うようだ。私の留学した場所は、中国でも最も南で、しかも隣はホンコンということもあり、中国とは思えない豊かな所であった。

ところで、何よりも興味深かったのは、もちろん中国人である。生活習慣、文化、言葉が違う事は当然ではあるが、やはり百聞は一見に如かずである。

私見ではあるが、一年間留学して最も感じたことは、中国人は心にゆとりがあるということである。これは生活にゆとりがあることとは別である。物事を考えたり、判断をする為のゆとりのことである。心にゆとりがあれば、少しぐらいの失敗もすぐに乗り越えることができるし、又失敗を防ぐことも可能であると私は思う。

現在、先進国の人々は、我々も含めて物質的には豊かになっているが、その反面大事なものが失われつつあると思う。これを機に、ゆとりについて、考えてみたい。

（1991年12月執筆）

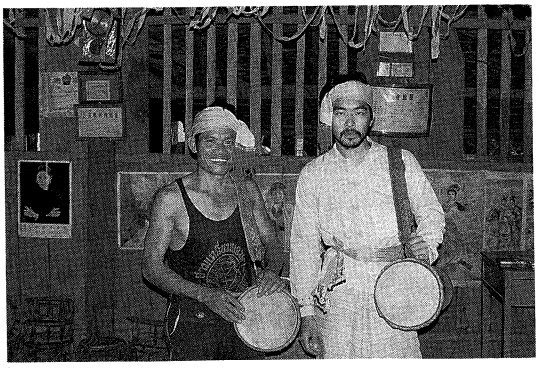
（雲南省昆明にてサニ族と一緒に　中央が筆者）

深圳滞在記

商学科4年　徳永　盛久

〔派遣先：深圳大学　1990年2月～1991年2月〕

深圳から熊本に帰って来て9ヶ月が過ぎました。今ではすっかり日本の生活に慣れてしまい、このような報告書を書くのにも時間がかかるようになりました。福岡空港から台湾経由で香港に着き、その日の内に国境を越えて中国に入りました。深圳に着く頃には日も暮れて、雨も降りだし、知らない所へ行く不



（雲南省西双納で傣族のおじさんと）

安も手伝ってだんだんと気が沈んで行ったのをおぼえています。

深圳市内には高層ビルが建ち並び、町の中も賑やかで、また温暖な気候に恵まれており、一年を通して新鮮な野菜や果物を見ることができ、肉や魚も豊富に揃っています。深圳大学はその市内から車で40分ほどの所にあり、大学はとても広くて、学内には商店や理髪店や病院などもあり、いろいろな設備が揃っており、何も心配することはありませんでした。授業ではアメリカやヨーロッパなどからの留学生と同じクラスで授業を受けることができ、みんなでいっしょに食事をしたり、スポーツをしたり、たまにはお酒を飲んだりして、仲良くなり、自分たちの国について、いろいろ話し合って、時にはお互いに強く主張し合ったりして、意見を交換し、それにより中国だけでなく、他の国のことも少し理解することができたような気がします。

前期が終り3ヶ月ほどの休みに入ると、中国に行く前から行きたいと思っていたシルクロードへの旅に出発しました。飛行機、長距離バス、列車などの交通手段を使い、中国の西端まで行き、それから南下して少数民族の村をいくらか見てきました。旅行中2泊3日の長距離バスでの移動や、夜中の2時ごろ目的地に着いて、それから泊まる所を探したりと、ちょっと危険な目にも会いました。その少数民族の村を見て、表向きには彼らは自分たちの伝統的な文化を守り続け、それに漢民族の文化をうまく調和させて生活しているように思えましたが、実際には独立のための民族運動が激しくなったり、暴動が起こったりとまだまだ問題があるようです。

この一年間の留学で、貴重な体験をし、言葉の重要性を実感し、新しい自分を発見できたようです。　（1991年12月執筆）

ジャパン・バッシング？

経済学科4年　柗永　佳甫

〔派遣先：モンタナ州立大学　1990年3月～1991年3月〕

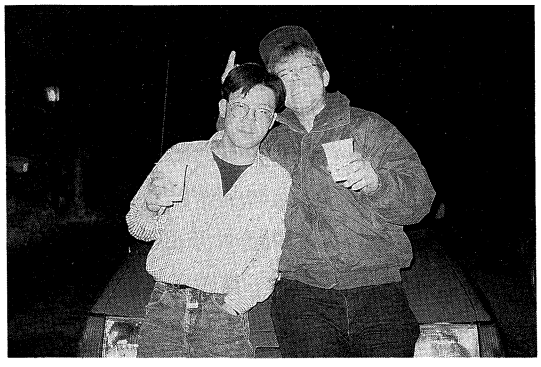
私が一年間の交換留学生としてモンタナに派遣されたとき一番印象的な出来事はやはり湾岸戦争でした。「戦争」といっても恐怖感、危機感はまったくといっていい程ありませんでした。アメリカが負ける可能性が限り無くゼロに近い戦争だったからではなく、戦争が何であるのか、戦争の恐怖がどんなものなのかわからなかったからだと思います。もはや「戦争」という言葉はただ歴史用語の一つにしか過ぎませんでした。

一方の軍隊経験を持つアメリカ人の学生でさえ私と同じように戦争が何であるかを理解している人はいなかったように思います。アメリカ人学生の誰もがペンタゴンからの召集命令を待っていました。当時のペンタゴンは映画みたいな戦争をしてみたいと思うアメリカ人学生にとって湾岸戦争代理店みたいなものでした。戦争当事国に偶然にも滞在するこ

とができて私は日本にいてはおそらく感じることのできない経験をすることができました。私にとって戦争を現実的な feeling へと近づけた出来事だったと思います。

私が帰国してよく人から聞かれたことは、日本が自衛隊を派遣しなかったことに対していわゆるジャパンバッシングはなかったかということです。しかし私はジャパンバッシングどころか人種的な差別さえ受けたことはありませんでした。ジャパンバッシングという言葉さえモンタナに住む人は知りません。ジャパンバッシングという言葉はロサンゼルスやニューヨークなど一部の都市でしか使用されない方言のようなものであると思います。モンタナに住む人たちは、モンタナの土地の広さと同じくらい心も広く私を暖かく迎えいれてくれました。

この一年間、無事に留学生活を送れただけでなく単位も取れ、親友も作ることができたのは、私一人の力ではなくモンタナの友人たちの、そして我が大学の国際交流室の方々の暖かい励ましがあったればこそだと思います。また、何よりもこのような機会を与えてくださった熊本学園、志文会の皆さまに心から感謝したいと思います。熊本学園の国際交流の発展に少しでも寄与できたことをとても幸福に思います。　（1991年12月執筆）



（ＭＳＵの友人と）

日本語を使う日々

深圳大学国際金融貿易学部
4年　朱　海　波

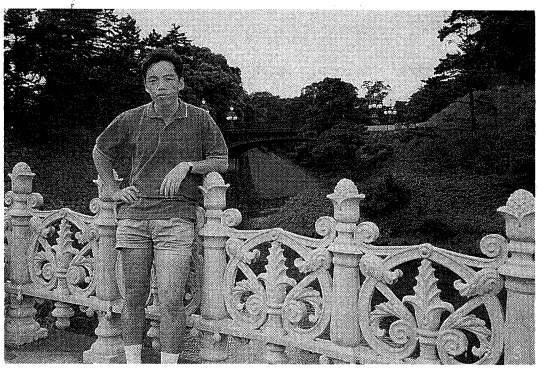
日本人のように日本語を話すことができることは、交換留学生として日本に留学しているうちに実現したい一つの夢だった。深圳大学で三年続けて日本語の講義を受けていたので、ある程度日本語が話せる私は、積極的に自分の日本語能力を楽しくテストし始めた。

熊本に来たばかりの時、ちょうど春休みに当って暇がたくさんあるので日本語の勉強はほぼ毎日朝から晩までやった。独学のほか四月からの講義をスムーズに受けられるように、国際交流室の先生方に特別日本語コースを設けていただき、とても助かった。一ヶ月ぐらいの特別コースはあっという間に終わってしまって担当の日本語先生に「日本語の勉強のほかに日本の文化をもっと勉強してください。」と助言していただいた。日本の文化をよく勉強したら、勿論日本語の勉強に役立つわけであるが、一日も早く日本人のように日本語が話せるため、日本語の教科書とテープばかりに熱中していた。

間もなく新学期が始まって、各サークルの募集活動でキャンパスが一時期賑わった。深圳大学ではそういう大規模なサークル募集が全く体験できず、テニスに興味を持っている私はすぐ人波に入り込んだ。せっかく日本にラケットを持ってきたので使わないわけにはいかないだろうと思って、テニスクラブに入った。

テニスクラブなんて決して遊ぶところではない。クラブのメンバーたちの真剣な練習ぶりに目を見張り本当に感心した。でも驚かざるをえないのは先輩と後輩ときちんと地位の区別がつけられていることだ。練習が一時終

わって先輩は水を飲みに行ったり陰に座って休憩したりする一方で、後輩は何も言わず解散してテニスコートの掃除を素早くやり出すことになっている。もっとひどいのは、一日の練習が終わった時、先輩は後輩にジュースを買ってくれと指示したら、後輩は何の怨言も言えず従うしかできないことだ。後輩は本当に可哀相だなあと私は思わざるをえない。今でも日本ではどうして先輩と後輩がはっきり区別されているかが理解しがたいままである。やはりその日本語の先生のおっしゃった



（皇居前で）

通り、日本の文化をちゃんと勉強せねばならない。テニスクラブに留学生の参加は私が初めてだそうで、クラブのメンバーたちと一緒に練習したり試合に出たりして楽しい日々だった。しかも、彼たちにいつも親しく教えてもらって忘れがたい貴重な体験となった。

夏休みの旅行の最高のシーズンに沖縄の美しいビーチや岡山の雄大な瀬戸大橋や横浜の中華街などに足跡を残した。中華街のレストランで、久しぶりに本場の中華料理を味わい、中国に帰ったような気がした。夏の旅行は学んだ日本語を自慢している旅だったとも言えるだろうと思う。

光陰矢の如しとよく言われ、一年間の留学生活の既に四分の三が過ぎていった。商大の先生方のお蔭で、勉強も生活も順調に進んでいる。日本語は毎日使っているせいか、ずいぶん上達したが、これはただ言葉のまねでしかないと思う。日本の文化に疎い私にとっては、真に日本人のように日本語を話すことがなかなか難しいと一層強く感じさせられる。

（1991年12月執筆）

〔1991年2月～1992年2月　本学滞在〕

日本滞在記

深圳大学管理学部
4年　徐　麗　君

旧い一年が去って行き、新しい一年がやって来ました。初めて異国でお正月を迎えました。それは、今まで過ごした正月と違って、新鮮な気持ちで、もっとも楽しい日々を送りました。今月末の後期試験を終えてから、自分の祖国に帰らなければなりません。ですから、これを考えて、日本の親友と別れる悲しさと家族に対する恋しさが混ざり合って、今自分の気持ちはなんとも言えません。

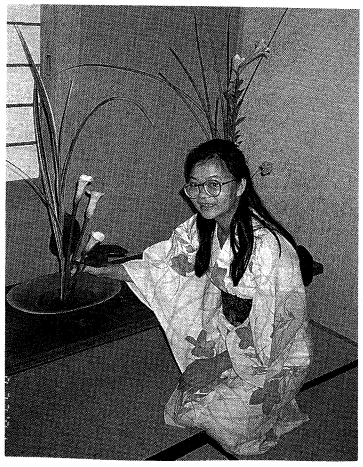
日本の経営管理を勉強するために、交換留学生として熊本商科大学に来てもう十ケ月になりました。その過ぎた一年の留学生活の楽しい思い出は数えきれません。商大に入ってから、先生方の親切にあまえて、日本の生活にすぐ慣れました。そして、自分自身からも積極的に先生と交流したり、友達と遊んだりすることによって、自分の生活もだんだん充実されて、楽しくなりました。その中で、一番忘れられないのは北海道の旅です。

国際交流室のすすめを受けて、夏休みを利用して北海道へホームステイに行きました。私のホストファミリーはすごくいい人たちで、私にほんとうの家族の一員のように接してくれて、楽しい10日間を過ごしました。10日間一緒に料理を作ったり、ゲームをやったり、

あるいは弁当とおやつを持って車で一日中湖を見に行ったりして、楽しい家庭生活を送りました。また、私は熊本に帰ってから、互いに手紙を書いたり、電話をかけたりして、熊本と北海道の交流を続けて、自分はほんとうに日本に家族が存在する感じがして、すごくうれしいと思っています。今では、ちょっとホームシックになった時、すぐに北海道のお母さんに電話してしゃべることで、ホームシックも治すことができます。

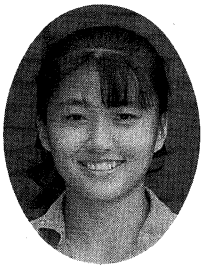
（1992年１月執筆）

〔1991年２月～1992年２月　本学滞在〕

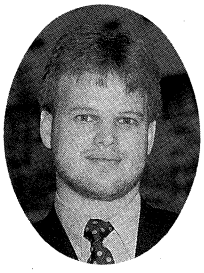


（日本文化の体験）

米国・サンアントニオ市との交流



熊本市と姉妹都市サンアントニオ市との交流事業として平成元年度より開始された留学生の交換に本学が参加して２年目にあたる1991年度は、国際経済学科２年の橋本美穂さん（写真左）を派遣し、派遣先であるインカーネットワード大学よりルイス・マシュース君（写真右）を経営学科に受け入れた。



第10回春期モンタナ派遣短期留学生

〔モンタナ州立大学〕

国際経済学科　２年　前川　佳子
国際経済学科　１年　岩崎　孝治
短大　社会科　２年　松崎　由美

〔キャロル大学〕

経営学科　３年　清原　裕子
国際経済学科　２年　植田　仁美

（派遣期間：1992年２月６日～３月30日）

平成４年度長期交換留学生

〔中国・深圳大学〕

経済学科　２年　緒方　浩一
国際経済学科　１年　倉重　圭介

（派遣期間：1992年２月～1993年２月）

〔米国・モンタナ州〕

商学科　２年　中村　洋子

〔米国・モンタナ州〕

国際経済学科　２年　矢澤　恵子
国際経済学科　２年　西澤　和晃
国際経済学科　１年　成松　明子
国際経済学科　１年　石黒　武人

（派遣期間：1992年８月～1993年８月）

特集　国際交流を考える　（３）

留学生を支える人々

熊本ＹＷＣＡ『留学生の会』

会長　古川　紀美子

熊本ＹＷＣＡ『留学生の会』は、1989年３月、日本に留学して来た世界各国の若者達が、少しでも生活にゆとりをもって勉学に専念し、将来日本との交流のかけ橋となってくれることを念願して発足しました。草の根の活動を続けてきましたが、熊本経済界の方々の御支援を受け、本年５月、熊大西隣りの熊本ＹＭＣＡ花陵会の敷地の一部を借用して、「留学生リサイクルセンター」を竣工するに到りました。当初は物品の調達、収集に苦労しましたが、センターの存在が広く知れわたるようになって、市民からの物品の提供も増え、留学生だけでなく、交換教授の方々にまで、生活用品の調達に便利に利用されています。

『留学生の会』は、単に生活用品の提供だけでなく、日本語学習や日常生活のあらゆる相談にも応じています。その内容に関しては、受け入れ側の対応の参考になればと、県の国際交流活性化連絡協議会留学生部会等で報告しています。文化・宗教・習慣の相違から、相談の内容は驚く程多彩であり、また、日本語学習の要望は増える一方です。最近は家族を伴う留学生が増え、教師が不足する現状です。需要に応ずるため、６月から12月まで毎月１回、日本語ボランティア教師育成講座を開講し、何とか不足を補おうと懸命です。しかし、充分な対応には程遠い状態で、最も気がかりなのは学童達です。学校生活に馴染んでいるだろうか、日本語の理解は出来ているだろうか、心配はつきません。

（留学生リサイクルセンター）

『留学生の会』の主な活動を紹介します。

・日用品リサイクル活動
・日本語教育ボランティア
・日本人家庭の紹介
・生活情報ミニニュース発行
・相談室および談話室開設
・日本文化紹介
・国際問題勉強会

会の運営は、会員の会費によってまかなわれるボランティア活動であるために、ささやかな活動ですが、会員一人一人は、”Think globally, act locally.”（世界を見つめ、地域に生きる）をモットーに、世界が友好に結ばれた国際社会となることを願って、その礎として活動を続けています。

現在の会員の大多数は中年婦人であるために、エネルギーに満ちた明日を支える若い方々の積極的な参加を熱望しています。

（1991年12月執筆）

本学の留学生への学外からの主なご案内　(1991年)

名　　称	主　　催	内　　容	期　日
激励懇談会	熊本南ロータリークラブ	懇談会	1991/2/13
国際理解クラブ	出水小学校	交流会	2/20
熊本弁弁論大会	益城町商工会議所	弁論大会	3/2
文化財を見る会	熊本ユネスコ協会	人吉の文化財見学	3/10
留学生の会	熊本ＹＷＣＡ	日本の家庭紹介 各種行事への案内	年間を通じ随時 入会申込受付
防災教室	市消防広報室(防災センター)	防災についての説明	4/24
ローターアクト留学生交流会	国際ロータリー 第272地区ローターアクト	スポーツ交流・他	6/9
留学生支援の集い	ライオンズクラブ国際協会 337-D地区	懇談・夕食会	6/12
北海道国際交流のつどい	北海道国際交流センター	ホームステイ・他	8/17～9/1
国際文通週間	熊本東郵便局	友の会会員との交流	10/10
「ワールドウォッチングクラブ」訪問	出水小学校	児童との交流	10/11
天草国際会議－2	天草本渡青年会議所	国際会議とホームステイ	10/19・20
第2回九州留学生芸術祭	福岡キワニスクラブ・ 福岡留学生会	芸術品コンクール	11/15・16・17
懇談会	熊本県地域婦人会連絡協議会	懇談・図書券の寄贈	11/22
「国際理解クラブ」訪問	高平台小学校	児童との交流	11/22
市内見学会	熊本市国際交流室	施設見学	12/1

国際交流の第一歩

国際交流クラブを抱える小学校から本学の留学生へのご案内が多い。これは昨年10月に出水小学校を訪問した中国からの留学生宋金梅さんに対する子供たちからの礼状である。遊びや歌などを通して外国の人に関心を持ち、理解を育てている小学生の姿が表れている。

（ワールドウォッチングクラブ訪問）

宋金梅さんへ

出水小学校　4年2組
上山　千奈

こんにちは。お元気ですか。こないだの、交流会とてもおもしろかったです。たぶん、上山千奈といっても、おもいつきませんね。アップルパイを作ってきたんです。おいしかったですか。急いで帰っていったので、遊ぶことができませんでした。残念です。予定では、おじぞうさんをしたかったのです。思ったより日本語が上手だったのでびっくりしました。字もきれいだったです。さいしょは、おとなしそうだったので、つきあいにくいかなと思ったけど自分からハキハキとしゃべったので、よかったな、と思いました。また今度交流会があったらまた、アップルパイをちょっと大きめに焼こうと思った。とても楽しくていい思い出になったです。また、会えたらうれしいです。では、再見。さようなら。

宋金梅さんへ

出水小学校　6年2組
石崎　綾華

宋金梅さんお元気ですか。このまえ、金梅さんが出水小学校に来てくれましたね。歌や、中国語などを教えてくれてありがとうございました。

私は、金梅さんの所から左の付月ちゃんの左にいた、石崎綾華です。おぼえててくれましたか？　おぼえててくれたらとてもうれしいです。月ちゃんから聞いたんですけど、石崎綾華は、中国語でいうと、シーチン・リンファーというそうです。

中国語で教えてくれたのは、再見（ツァイチェン）とかシェイシェイとか教えてくれたのでよく分かりました。歌は、お母さんにかんしゃする歌はよく分かったけど、少し分からない所もありました。金梅さん中国語はむずかしいですね。日本語はむずかしいですか？　これからも、大学でがんばって下さい。また会う日まで ...。さようなら

1991年度　留学生名簿

学部留学生・学科留学生　（1991年12月１日現在）

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	韓　景　光	男	中国	商大・商学部・商学科・１年１組
2	慕　強	男	中国	商大・商学部・商学科・１年１組
3	李　勤	男	中国	商大・商学部・商学科・１年２組
4	劉　梅	女	中国	商大・商学部・商学科・１年４組
5	呂　跃　進	男	中国	商大・商学部・商学科・１年５組
6	姚　嘆	男	中国	商大・商学部・商学科・１年９組
7	楊　兆　利	男	中国	商大・商学部・経営学科・１年１組
8	呉　志　仁	男	台湾	商大・商学部・経営学科・１年２組
9	李　剛　剛	男	中国	商大・商学部・経営学科・１年３組
10	陳　惠　敏	女	台湾	商大・商学部・経営学科・１年４組
11	曲　家　岩	男	中国	商大・経済学部・経済学科・１年４組
12	陳　宏　孟	男	台湾	商大・経済学部・経済学科・１年４組
13	李　尚　家	男	台湾	商大・経済学部・経済学科・１年７組
14	李　芳　琪	女	台湾	商大・経済学部・国際経済学科・１年１組
15	袁　秀　雲	女	中国	商大・経済学部・国際経済学科・１年４組
16	陳　秋　娟	女	台湾	商大・経済学部・国際経済学科・１年４組
17	李　谷　偉	男	中国	商大・経済学部・国際経済学科・１年４組
18	全　相　順	女	韓国	短大・保育科・１年２組
19	李　東　蘭	女	韓国	短大・教養科・１年５組
20	楊　津　京	男	中国	商大・商学部・商学科・２年３組
21	喬　軍　鋒	男	中国	商大・商学部・商学科・２年４組
22	白　学　澤	男	中国	商大・商学部・商学科・２年５組
23	韓　相　倫	男	韓国	商大・商学部・経営学科・２年１組
24	崔　相　哲	男	韓国	商大・商学部・経営学科・２年１組
25	林　遠　玲	女	台湾	商大・商学部・経営学科・２年１組
26	金　仁　萬	男	韓国	商大・商学部・経営学科・２年２組
27	周　淵　龍	男	台湾	商大・商学部・経営学科・２年３組
28	李　徳　華	男	中国	商大・商学部・経営学科・２年４組

29	朱　毓　雷	男	中　国	商大・経済学部・経済学科・２年１組
30	林　共　河	男	台　湾	短大・社会科・２年２組
31	劉　惠　瑛	女	台　湾	短大・教養科・２年４組
32	孫　永　紅	女	中　国	商大・商学部・商学科・３年１組
33	黄　啟　光	男	台　湾	商大・商学部・経営学科・３年１組
34	劉　　冲	男	中　国	商大・商学部・経営学科・３年１組
35	孫　躍　東	男	中　国	商大・商学部・経営学科・３年２組
36	林　倩　穂	女	台　湾	商大・経済学部・経済学科・４年３組

学部研究留学生・学科研究留学生

1	苗　鉄　鋒	男	中　国	商大・商学部・商学科
2	王　跃　华	女	中　国	商大・商学部・商学科
3	宮本富男	男	ブラジル	商大・商学部・商学科
4	于　杰　春	女	中　国	商大・商学部・商学科
5	孫　琮　河	男	韓　国	商大・商学部・商学科
6	金　光　厚	男	韓　国	商大・商学部・商学科
7	劉　　傑	女	中　国	商大・商学部・商学科
8	孫　文　亮	男	中　国	商大・商学部・経営学科
9	マルコム・F・メヘタ	男	インド	商大・商学部・経営学科
10	陳　　正	男	中　国	商大・商学部・経営学科
11	金　雪　莉	女	台　湾	商大・商学部・経営学科
12	王　永　芳	男	台　湾	商大・商学部・経営学科
13	孫　愛　紅	女	中　国	商大・商学部・経営学科
14	金　正　宇	男	中　国	商大・商学部・経営学科
15	廖　柏　明	男	中　国	商大・商学部・経営学科
16	ウルスラ・ビクトリア野村(亀井)	女	ペルー	商大・経済学部・経済学科
17	社　慕　府	男	中　国	商大・経済学部・経済学科
18	徐　海　洋	女	中　国	商大・経済学部・国際経済学科
19	金　大　丁	男	韓　国	商大・経済学部・国際経済学科
20	高　鐘　哲	男	韓　国	商大・経済学部・国際経済学科
21	李　滿　鎬	男	韓　国	商大・経済学部・国際経済学科
22	金　鎭　雄	男	韓　国	商大・経済学部・国際経済学科

23	金　成　煥	男	韓　国	商大・経済学部・国際経済学科
24	喻　子　林	男	中　国	商大・経済学部・国際経済学科
25	陳　力　臺	男	台　湾	商大・経済学部・国際経済学科
26	廖　東　鳴	男	中　国	商大・経済学部・国際経済学科
27	デービス・セバスチャン	男	イ　ン　ド	商大・経済学部・国際経済学科
28	仰　英　姿	女	中　国	商大・経済学部・国際経済学科
29	楊　書　敏	女	中　国	短大・社会科
30	張　　华	男	中　国	短大・社会科
31	魏　　玲	女	中　国	短大・保育科
32	李　柏　桐	男	中　国	短大・教養科
33	宋　金　梅	女	中　国	短大・教養科
34	陳　海　生	男	中　国	短大・教養科

大学院生

1	周　佩　文	女	台　湾	商大大学院・商学研究科・修士課程
2	湯　小　寧	男	中　国	商大大学院・商学研究科・修士課程
3	鄭　凱　希	男	中　国	商大大学院・商学研究科・修士課程

交換留学生

1	朱　海　波	男	中　国	商大・経済学部・経済学科
2	徐　麗　君	女	中　国	商大・商学部・経営学科
3	アリサ・ピッツスティック	女	アメリカ	商大・商学部・経営学科
4	ティム・クルースナー	男	アメリカ	商大・経済学部・国際経済学科
5	クリス・リーネッシュ	男	アメリカ	商大・経済学部・国際経済学科
6	マット・ハーディ	男	アメリカ	商大・経済学部・国際経済学科

サンアントニオ市派遣留学生

1	ルイス・マシュース	男	アメリカ	商大・商学部・経営学科

海外ゼミ研修

（過去4年間の海外ゼミ研修一覧）

年	引率教員名	研修先	期間	参加学生
1988年	宮崎　俊策	韓国	2/29 ～ 3/ 2	22名
	中野いく子	中国／深圳大学	3/14 ～ 3/17	13名
	岡本　悳也	韓国／大田大学	4/11 ～ 4/15	24名
	勝部　伸夫	中国／深圳大学	6/16 ～ 6/20	19名
	田島　司郎	中国／深圳大学	9/15 ～ 9/19	13名
	田島　司郎	中国／深圳経済特区	10/13 ～ 10/17	16名
	中野　裕治	韓国／大田大学	11/21 ～ 11/24	18名
	中野いく子	韓国／大田大学	11/21 ～ 11/24	16名
	岡本　悳也	中国／深圳大学	12/ 1 ～ 12/ 5	57名
	古田　龍助	中国／深圳大学	12/ 1 ～ 12/ 5	
1989年	宮崎　俊策	韓国	2/13 ～ 2/15	16名
	花谷　　薫	米国／ハワイ	2/18 ～ 2/23	33名
	勝部　伸夫	韓国／大田大学校	11/22 ～ 11/25	20名
	田島　司郎	中国／深圳大学	11/26 ～ 11/29	33名
	杉田　憲道	中国／深圳大学	11/26 ～ 11/29	6名
	花谷　　薫	米国／ハワイ	12/ 6 ～ 12/11	15名
	岡本　悳也	マレーシア・シンガポール	12/13 ～ 12/17	34名
1990年	山内　良一	ヨーロッパ	2/14 ～ 2/21	13名
	田島　司郎	韓国／大田大学校	11/25 ～ 11/28	18名
	田中　利彦	シンガポール・マレーシア	12/12 ～ 12/16	43名
	岡本　悳也	シンガポール・マレーシア	12/12 ～ 12/16	
	木戸田四郎	韓国／ソウル	12/14 ～ 12/17	16名
1991年	宮崎　俊策	韓国／ソウル	2/25 ～ 2/27	20名
	小島　恒久	香港・中国／深圳	2/26 ～ 3/ 1	13名
	西　　紀昭	中国／北京・西安・上海	3/ 6 ～ 3/12	10名
	用稲　孝道	米国／グアム	3/10 ～ 3/14	11名
	田中　利彦	韓国／ソウル・イムジン	11/ 6 ～ 11/ 8	14名
	朴　　哲洙	韓国／ソウル・イムジン	11/ 6 ～ 11/ 8	8名
	杉田　憲道	中国／深圳大学	12/18 ～ 12/21	16名
	小島　恒久	中国／深圳大学	12/18 ～ 12/21	10名
	野尻　秀之	台湾	12/22 ～ 12/25	4名

SEMINARS

国際交流室主催：交換教授による教職員向け語学教室

1．韓国語会話クラス

講　師　　鄭　鳳　輝　先生（韓国・大田大学校）

開催日　　1991年10月２日から1992年１月22日まで原則として毎週水曜日

時　間　　17:00 ～ 18:00（但し、今回は１時間半の授業の日も多かった。）

2．中国語会話クラス（１）

講　師　　戴　璨　之　先生（中国・深圳大学）

開催日　　1991年２月28日から７月26日まで原則として毎週木曜日

時　間　　17:00 ～ 18:00

3．中国語会話クラス（２）

講　師　　侯　梅　芳　先生（中国・深圳大学）

開催日　　1991年10月３日から1992年１月24日まで原則として毎週木曜日

時　間　　17:00 ～ 18:00

4．英語会話クラス

講　師　　ハロルド・シュロッツハウアー先生（米国・モンタナ州立大学）

開催日　　1991年10月４日から1992年１月24日まで原則として毎週金曜日

時　間　　17:30 ～ 18:30

※　他にも研究所や学部等が主催する講演会が多数あり、記載は省略する。

国際交流委員会が新メンバーでスタート！

平成４年１月より国際交流委員が下記のメンバーに交代した。

（敬称略）

国際交流委員長　　古　田　龍　助

国際交流委員

商学部	北　原　明　彦	杉　田　憲　道
経済学部	田　中　冨志雄	カーク・マスデン
教養部	足　立　昭七郎	堀　　正　広
短　大	大　野　哲　夫	原　口　行　雄
事務局	総務課長　星子　三郎	
	国際交流室　西村　禮二	喜佐田知子

１９９１年　国　際

月	モンタナ	大田
１月	１日　グレゴリー H.オルソン先生(交換教授)就任	
２月	５日　春期短期派遣留学生（５名）出発	23日　渡邊　晧先生（交換教授）帰国
３月	23日　柗永佳甫君（長期交換留学生）帰国 26日　清田俊秀君（長期交換留学生）出発 29日　宮本雅子さん（長期交換留学生）出発 30日　春期短期派遣留学生（５名）帰国	13日　勝部伸夫先生（交換教授）出発
４月		
５月		
７月	９日　モンタナ大学学長来学	
８月	20日　夘野木佐代子さん（長期交換留学生）出発	13日　具本璋先生（交換教授）帰国
９月	４日　ハロルド・シュロッツハウアー先生(交換教授)来熊 12日　モンタナ州立大生（長期交換留学生）２名来熊 18日　キャロル大生（長期交換留学生）２名来熊	３日　大田大学校訪問学生研修団出発 ９日　大田大学校訪問学生研修団帰国 10日　鄭鳳輝先生（交換教授）来熊
10月	25日　モンタナ大学生涯教育・夏期研修センター長来学	４日　大田大学校経営行政大学院研修団来学
11月	20日　モンタナ大学 リチャード・デイリー教授来学 25日　モンタナ州立大学学長来学	
12月	17日　モンタナ州熊本貿易事務所代表来学	

交　流　EVENTS

深　圳	そ　の　他
20日　戴璨之先生（交換教授）・朱海波君 徐麗君さん（長期交換留学生）来熊 25日　村橋秀樹君・西村美夏さん（長期交換留学生）出発 28日　古堅育子さん(長期交換留学生)帰国	27日　ニュージーランド・ワイカト大学代表来学
2日　徳永盛久君（長期交換留学生）帰国 13日　杉田憲道先生（交換教授）帰国	22日　豪州・フィッツジェラルド氏来学
	23日　甲南イリノイ学生研修団来学 26日　甲南イリノイ学生研修団離熊
	22日　ニュージーランド・イングリッシュ・ランゲージ・カレッジ校長来学 24日　ニュージーランド・ワイカト大学代表来学 米国・アワーレディオブザレイク大学代表来学
18日　深圳市外事辦公室副科長来学	3日　ロバート・テロ君(サンアントニオ市派遣留学生)離熊 12日　米国・インカーネットワード大学後藤教授来学
	16日　橋本美穂さん（熊本市派遣留学生）出発
6日　戴璨之先生（交換教授）帰国 13日　侯梅芳先生（交換教授）来熊	13日　英国・リバプールポリテクニック　ビジネス学部代表来学 30日　ルイス・マシュース君(サンアントニオ市派遣留学生)来学
20日　深圳大学訪問団（学長一行）出発 24日　深圳大学訪問団（学長一行）帰国	9日　米国・南加県人会松村様来学

新国際交流委員会メンバー

◎古田龍助・北原明彦・杉田憲道・田中冨志雄
カーク・マスデン・足立昭七郎・堀　正広・大野哲夫
原口行雄・星子三郎・西村禮二・喜佐田知子

旧国際交流委員会メンバー

◎永末嘉孝・野尻秀之・北原明彦・岡本悳也
笹山　茂・西　紀昭・吉川勝正・柏野健三
原口行雄・星子三郎・西村禮二・喜佐田知子
（◎は委員長）

〒862　熊本市大江２丁目５番１号
熊本商科大学
熊本短期大学
ＴＥＬ(096)364－5161